

『祈るということ』

交流学科 2年 青木麻衣

日本人や韓国人、中国人など アジア各地から来る観光客たちは美しい景色を背景に、笑顔で写真を撮る。日本軍最後の司令部があった「ラスト・コマンド・ポスト」で、旧日本軍が使用した砲台にまたがったりして 無意味なピース・サインをしながら写真を撮る観光客は多い。もし私が、多大な被害を生んだサイパン戦の事実を知らなかったら、私も同じように写真を撮っていたかもしれない。激戦が繰り広げられた ビーチや、追い詰められた人々が身を投げたスーサイド・クリフ、バンザイ・クリフの当時の光景を思い浮かべると、あっけらかんとした振る舞いはできない。

私たちゼミ生は、戦跡を訪ねるとき必ずお線香とお水を捧げ「お騒がせします」とひとこと告げてから見学した。戦時中は、のどが渇いても水が飲めず、辛く苦しい中亡くなられた方々がたくさんいた。お水をあげるのは、そんな彼らを慰め「安らかに眠りください」と祈るためである。また、先住民であるチャモロの人々の伝統信仰によると、ジャングルには 亡くなった方たちの霊が残っていると考えられているため、静けさを破らぬよう、そのように断わってからお祈りするのだ。

私はこの研修で、日本人だけではなく、すべての犠牲者に対して慰霊の気持ちを捧げてきた。日米の戦いに巻き込まれたチャモロ人、キャロリニアン人、労働力としてサイパンに連れてこられた朝鮮人や中国人、そして当時は敵対していた米軍兵士。サイパンには、戦後65年経った今でも彼らの遺骨が眠っているのだ。

慰霊の気持ちに国籍など関係ない。日本人だからといって、日本人犠牲者だけに慰霊の気持ちを持つのは間違っている。もちろん、その逆も同じである。サイパンを訪れる観光客は、自分の出身地に関係なく、この島で亡くなった全ての人たちに対する慰霊の気持ちを持ってもらいたい、と心から感じた。

